くり新品種「国見」の特性

1 来 歴

国見は、農林水産省果樹試験場において、丹沢に石鎚を交配して育成した品種で、昭和56年11月に「国見」と命名され、58年2月に種苗法に基づき品種登録された。当場では、昭和48年から第3回系統適応性検定試験として検討してきた。その結果、丹沢と筑波の中間に成熟する品種として、優良と認められ、昭和58年に本県の推奨品種に決定された。

2 特性概要

樹性を表-1に示した。樹勢は中～やや弱で伊吹よりは弱い。樹姿はやや開張性である。若木時代は枝がよく伸長するが、樹令とともに樹冠の拡大は緩やかになる。樹の大きさは小形で、枝の発生密度は中位で伊吹より少ない。開花期は、昭和49年～57年までの9年間の平均で表わすと、始めが6月17日、盛りが6月20日、終りが6月27日で伊吹とほとんど同時期である。雌花の着生について、新しう当たりの雌花は、2～3個着くが枝数が多くないため樹全体では中程度である。8月の生理落果は少ない。収穫期は9年間の平均で、始めが9月12日、盛りが9月17日、終りが9月23日で伊吹と同じ時期に収穫され、丹沢の収穫が終る9月17日から、筑波の収穫が始まる9月21日までの間をつなぐことができる。クリタマバチの寄生は、石鎚と同程度で丹沢、伊吹、筑波と比べ明らかに少なく、寄生がわずかに認められる程度である。

収量を表-2に示した。1樹当たり収量は、年による差はあるが成木で16～17kgである。年次別にみると昭和54年までは年ごとに収量が増加したが55年以降樹勢が弱まったために、収量が漸減したが57年は冷夏による影響と考えられる。10a当たり換算収量は、4.5×4.5mの48

表-1 樹 性

年次 昭和	樹令	樹 勢	樹 姿	樹幅 m	樹高 m	開花期(日)			収 穫 期			クリタマバチ 被害程度
						始	盛	終	始	盛	終	
49	3	中～強	中	—	—	6.16	6.20	6.26	9.23	9.28	10.1	—
50	4	中	中	—	—	6.16	6.18	6.26	9.18	9.25	10.1	—
51	5	中	中	4.5	4.0	6.12	6.23	6.30	9.13	9.18	9.24	—
52	6	中	中	6.1	4.5	6.13	6.19	6.29	9.8	9.14	9.22	—
53	7	中	中	6.5	4.5	6.18	6.21	6.25	9.8	9.11	9.18	—
54	8	中	中	7.0	4.6	6.17	6.20	6.26	9.10	9.15	9.22	—
55	9	やや弱	やや開	7.3	4.7	6.15	6.18	6.27	9.8	9.12	9.19	—～±
56	10	中～やや弱	やや開	7.9	4.9	6.22	6.24	7.4	9.14	9.19	9.24	—～±
57	11	中～やや弱	やや開	7.8	5.2	6.10	6.15	6.22	9.9	9.14	9.20	—～±
平均		中～やや弱	やや開			6.17	6.20	6.27	9.12	9.17	9.23	—～±

表-2 収量(kg)

年次 昭和	樹令	1 樹当 り 収 量	10a当 たり 換 算 収 量
51	5	6.7	322
52	6	10.5	378
53	7	13.6	435
54	8	21.0	504
55	9	17.9	430
56	10	17.2	413
57	11	15.2	365

注 10a 当たり換算収量の栽植本数は48本、52年が48本(うち24本が収量1/2)、53年が48本(うち24本が収量1/3)、54年以降24本とした。

表-3 果実の特性

年次 昭和	平均 果重 g	粒揃	品種	ふた 子果 率%	裂果%		虫害 果率 %	比重
					果頂	座		
49	27.9	やや不良	やや不良	9.0	4.6	0.0	0.0	—
50	30.9	中	中	6.9	3.2	0.0	6.7	—
51	24.7	良	中	7.5	1.3	0.0	1.0	—
52	22.7	良	中	7.5	3.4	1.5	5.6	—
53	22.6	良	中	6.8	3.5	1.2	1.5	—
54	20.5	良	中	6.5	0.5	0.0	2.4	—
55	18.0	良	中	6.0	1.4	0.0	5.3	1.02
56	26.1	良	中	5.0	0.0	0.0	0.1	1.03
57	19.8	良	中	4.0	13.1	0.0	5.1	1.05
平均	23.7	良	中	6.6	3.4	0.3	2.9	1.03

本植えとして換算すると樹令5年生では322kgとなり、樹令6年生では樹巾が表-1から6.1mに拡大したため、48本中24本を縮伐し1樹当たりの収量を1/2として換算すると378kgとなる。樹令7年生では、樹幅が6.5mに拡大したため48本中縮伐中の24本の1樹当たり収量を1/3として換算すると435kg収穫されることになる。樹令8年で樹幅はさらに拡大するが、樹令10年以降は樹の広がり落ちついてくる。樹令8年以降10a当たり9×9m互の目の24本植えとして換算すると成木で概ね400kg収穫されることから豊産性とみなされる。

果実の特性を表-3に示した。果実は9年間の1果平均重が23g前後で伊吹と同程度の大きさになる。若木時代は、果実がかなり大きく、樹勢が弱まると果実が小さくなる傾向がある。昭和55年は、樹勢が弱すぎて果実が小さくなったため、強せん定を行った結果翌年には大きな果実が収穫できた。粒ぞろいは良く、果皮は褐色で光沢があり外観も良い。果実の比重は、1.03で伊吹より低いがくりの品種全体から見ると中位である。果肉は淡黄色で、伊吹に比べると淡い。肉質は伊吹に比べると粘質で甘味がやや少なく、ゆでくりとしての品質は中程度である。双子果率は、平均で6.6%と中程度であり、裂果は果頂裂果が3.4%にすぎず、座の裂果はわずかに認められる程度で、虫害果率も2.9%と低く、伊吹に比較するとくず果は明らかに少ない。

3 栽培上の注意事項

国見は、若木時代は枝がよく伸長して、果実が大きく収量も多いが、樹勢が弱まると果実が極端に小さくなりやすい。このため、肥培管理やせん定等について、丹沢や筑波などよりも集約的な栽培管理を行い、樹勢の維持に努めることが大切である。

(担当者 田中敏夫)